
第3回 生物多様性 日本アワード 授賞式

日時：2013年10月29日(火) 13:30~16:30
会場：国際連合大学 ウ・タント国際会議場

主催
公益財団法人イオン環境財団

後援
環境省 国連生物多様性の10年日本委員会
株式会社共同通信社 朝日新聞社 産経新聞社 日本経済新聞社 毎日新聞社 読売新聞社

プログラム

1. 授賞式 13:30～14:30

- ・開会の辞

- ・主催者挨拶

岡田 卓也 (公益財団法人イオン環境財団理事長)

- ・優秀賞表彰

- ・グランプリ発表

- ・審査講評

岩槻 邦男 (東京大学名誉教授)

- ・祝辞

星野 一昭 (環境省 自然環境局長)

2. 受賞者プレゼンテーション 14:40～15:30

3. 記念講演 15:30～16:30

「自然化社会をデザインする」

赤池 学 (株式会社ユニバーサルデザイン総合研究所 代表取締役所長)

受賞者プレゼンテーション

(50音順)

◆味の素株式会社

「太平洋沿岸カツオ標識放流共同調査と一連の協働・普及啓発活動」

◆特定非営利活動法人 田んぼ

「津波に被災した田んぼの生態系復元力による復興」

◆中越パルプ工業株式会社

「竹紙（たけがみ）」の取り組み

◆てるはの森の会

「綾の照葉樹林プロジェクト」

◆ネイチャー・テクノロジー研究会(東北大学大学院環境科学研究科)

「ネイチャー・テクノロジー創出のシステム構築」

※生活者からのコメント

「第3回 生物多様性 日本アワード」では、最終選考の対象となった取組について、オンライン上で生活者による意見交換を実施しました。参加者は、約1万名の中から《生物多様性に興味が高く、日ごろの環境・ソーシャル分野への意識・行動力も高い》、さらに、《自分なりの意見をまとめたりアイデアを考えるのが好き》な方を選抜した20～60代の全国男女34名。その方々から上がったコメントを記載しております。

味の素株式会社 「太平洋沿岸カツオ標識放流共同調査と 一連の協働・普及啓発活動」

<活動概要>

太平洋のカツオ資源を見守り、持続的な維持に貢献することを目的とし、2009年度より、(独)水産総合研究センター国際水産資源研究所との共同事業として、西日本太平洋沿岸海域においてカツオの標識放流調査を継続実施。未だわかっていないことが多いカツオの生態(回遊行動など)についての理解を深めるべく、南西諸島海域においてカツオの標識放流調査を行っている。

2012年度には、黒潮源流海域で初となる累計約500日間にわたる遊泳行動の詳細データの把握に成功。調査で得られた成果は、学術、国内水産行政、国内・国際漁業管理の面において重要であり、各種関連学会や水産関係者会議、また中西部太平洋資源管理機関に報告された。

<審査講評>

クロマグロやニホンウナギ等、生物の絶滅が問題視されているにも関わらず欧米においては十分な資源調査がなされていない。そのような中、本取組は継続的な資源調査を実施、海洋生物多様性の保全と持続可能な利用に貢献した。日本を代表する尊厳ある取り組み。

<生活者からのコメント>

・回遊魚の調査は広範囲にわたるうえ、標識魚を放流して何年もの間データを積み重ねる地道な作業で大変だと聞いたことがあります。規模の大きさ・広報力・機動力を考えれば大企業であればこそその研究といえるかもしれません。自社の得意分野、企業力を活かした活動と思います。カツオは日本の重要な水産資源。保全と安定供給の意味でも貢献度は高いと思います。(40代女性)

特定非営利活動法人 田んぼ 「津波に被災した田んぼの生態系復元力による復興」

<活動概要>

宮城県気仙沼を始め、塩竈、南三陸、岩手県陸前高田を中心に生態系の復元力を活用した自然農法のシステム(ふゆみずたんぼ)で津波被災地の田んぼの復興を実現。1200名を超える多様なボランティアを被災地に導入し、手作業で田んぼの復興を試み、抑塩にも成功。被災した年の秋から豊かな収穫を享受するに至った。

また、各地の生物多様性、水質、土壌成分の科学的なモニタリングにより、津波多発地帯の『津波被災後の農地は豊かになる』という言い伝えを科学的に証明。現地の信頼を得ながら継続的に津波被災地の田んぼを復元した。生物多様性の向上とともに、6次産業も含めた持続可能な経済システムが作り上げられつつある。

<審査講評>

被災地の生態系の持つレジリエンスを利用して田んぼの生産性を高め、被災地の復興に着実に貢献した。その功績には国際的な注目も集まっている。また併せて生物多様性調査を確実に実施しており、堅実な活動が高く評価された。

<生活者からのコメント>

- ・致命的ダメージを受けたと思われた土地で、古来からの農法を用いて田んぼを復活させた事は、非常に意義があり、また第6次産業にまで繋がっているところは、特に素晴らしい。(50代女性)
- ・大災害を受けた自然がどのように変化再生の道をたどるのかに興味があります。農業という自然を制御し生産を促す分野で、生物の働きや機能の活用、推論から導かれる可能性などを試験、実証することにより技術として確立し、回復の速度を速めようとする取組みです。(60代男性)

中越パルプ工業株式会社 「竹紙（たけがみ）」の取り組み

<活動概要>

かつてのように利用されることが少なくなった日本の竹を製紙原料として1998年より集荷を開始。試行錯誤の末、現在では九州地区を中心に年間2万トンを超える竹を紙の原料としている。竹を大量に活用していくことで、成長力の旺盛な竹の里山や森林への侵食を防ぎ、生物多様性保全に貢献する。

また、これまで価値がなかった竹を買い取ることで、深刻な過疎の農村地域において地域経済や雇用に貢献している。何よりも、放置竹で荒らされた山がきれいになったと喜ぶ地域住民が増えている。紙の製造という本業を通じて、全国的に解決困難な社会的課題である放置竹林問題に挑戦している。

<審査講評>

放置林となった竹林を活用することによって、里山の環境管理にも貢献。竹を紙の原料として利用するという取組は、中小規模の企業にこそ実現できた事業であり、その活動内容のわかりやすさは、生活者にも大きくアピールし高い評価を得た。

<生活者からのコメント>

・竹紙のために竹林を切り、整備するという取組が、里山再生の道筋になり期待が高まる。(40代男性)

・今や環境問題は日本だけの問題ではないと思いますが、日本人として、とても身近に感じられるのがこの《竹林から紙(和紙まで)》でした。将来的にティッシュやトイレットペーパー、竹炭など、まだまだ開発の余地がありそうですし、世界中に日本の製品として発信でき、たくさんの方が興味を持つのではないかと思います。

(40代女性)

てるはの森の会 「綾の照葉樹林プロジェクト」

<活動概要>

綾の照葉樹林プロジェクトは、九州森林管理局、宮崎県、綾町、(公財)日本自然保護協会、てるはの森の会の5者が協働して、約1万haのエリアにおいて国内最大面積の照葉樹林(約2500ha)を保護しているプロジェクト。二次林や人工林を照葉樹林に復元すること、自然と共生した地域づくりを支援することを目的としている。

日本の国有林では、2例目となる官民学協働プロジェクトの運営を担う事務局で、プロジェクトと市民を結ぶ窓口として、ボランティアと共に間伐体験、ガイド事業、林床調査、研究フォーラム等の多くの活動を行っている。

<審査講評>

2500haに及ぶ大規模な照葉樹林帯の保護に貢献。この取組は、ユネスコエコパークへの登録にとどまらず、屋久島、白山における活動にも大きな影響を与えており、普及伝播の側面からも評価の高い取組みだといえる。

<生活者からのコメント>

- ・照葉樹林は減少の一途を辿り、今では国土のわずか1.54%。自国の森林の減少をもっと心配しなくてはいけない、多様な生物に必要な森と水を人は保全する責任があると強く思いました。(60代女性)
- ・官民学協働で、一般市民も巻き込み、五者協定による協働活動、どれが欠けても展開は難しかったと思います。未来の生物多様性のためにも、この活動に頑張っていていただき、もっと沢山の人を巻き込んで息長く展開してほしい。(50代女性)

ネイチャー・テクノロジー研究会
(東北大学大学院 環境科学研究科)
「ネイチャー・テクノロジー創出のシステム構築」

<活動概要>

環境問題の解決のためには、従来の延長(フォアキャスト)ではなく、バックキャスト思考で心豊かなライフスタイルを描き、それに必要なテクノロジーを、完璧な循環を最も小さなエネルギーで駆動する自然から学び、新しい技術やビジネスを創出していく必要がある。

ネイチャー・テクノロジー研究は、テクノロジーを自然に学ぶだけではなく、人と自然の関わりをバックキャストや90歳ヒアリングで深く観、自然をさらに科学してその叡智を学んで活かすための研究と実践である。現在、多くの企業、地方自治体などを巻き込んで、研究・実践(ビジネス、政策開発)を行い、また、子供たちや社会人への教育活動も積極的に進めている。

<審査講評>

ものづくりの観点から生物に学ぶことによって、生物が単なる保護・保全の対象ではなく、人類の有用な資源であり知的財産の宝庫であることを訴えている。東北大学大学院を中心とした本取組は、企業のみならず、若者や子どもへの普及啓発効果も大きい。

<生活者からのコメント>

・21世紀は生物多様性に回帰する世紀だと感じさせ、環境により良い技術革新の先導役となるプロジェクト。今生み出されている技術には、自然からのヒントによって発明されたものも少なくない。(40代男性)

・完璧な循環を最も小さなエネルギーで駆動している自然のメカニズム・システムに学ぶという発想を、小学生から社会人まで、幅広い年代層に啓蒙している。

(50代女性)

赤池 学 「自然化社会をデザインする」



<プロフィール>

株式会社ユニバーサルデザイン総合研究所 代表取締役所長、科学技術ジャーナリスト。
1958年東京都生まれ。1981年筑波大学生物学類卒業。

社会システムデザインを行うシンクタンクを経営し、ソーシャルイノベーションを促す、環境・福祉対応の商品・施設・地域開発を手がける。「生命地域主義」「千年持続学」「自然に学ぶものづくり」を提唱し、地域の資源、技術、人材を活用した数多くのものづくりプロジェクトにも参画。

近著に、『昆虫力』（小学館）、『自然に学ぶものづくり』（東洋経済新報社）、『ニッポンテクノロジー』（丸善）など。

最終選考の対象となった取組み（50音順）

認定特定非営利活動法人アースウォッチ・ジャパン

「いきものたちの3.11/東日本グリーン復興モニタリングプロジェクト」

東北大学大学院が行う科学的な調査に一般市民をボランティア調査員として現地に派遣するプログラムをスタートさせ、地域の豊かさや強さにつながる生態系の回復力を助ける活動を実施している。

<生活者からのコメント>

・放射能は眼に見えず、被害の実態がわかりにくい。こうした調査において多くの地点で科学的・実証的な調査と分析をし、多くの人たちが関わる必要がある。（60代男性）

愛知県環境部自然環境課

「生態系ネットワーク+代償ミティゲーション=あいち方式 愛知目標達成に向けたコラボレーション」

産業県・愛知において「環境と経済の調和」を図るため、多様な主体と協働しながら、分断された生態系をネットワーク化し、地域特有の生態系の保全と再生を図る「生態系ネットワーク形成」を推進している。

<生活者からのコメント>

・環境破壊を顧みず経済成長まっしぐらの時代から脱した新しい取り組みですね。これがモデルケースとなり、地域⇒県⇒国⇒各国って広がる事を期待。（30代男性）
・この国の都市部の環境問題への取り組みは、本当に頼もしい日本の変化であり、あらゆる意味で21世紀の変革につながって欲しいです。（50代男性）

株式会社アレフ

「ふゆみずたんぼプロジェクトと「生きもの豊かな田んぼ」の取組」

2006年から、ふゆみずたんぼ型の農法の実践と調査、体験プログラムを毎年実施。そして、生物多様性保全に貢献する稲作農法を基準化し、農家に取組を呼びかけ、2010年からそのお米をびっくりドンキーで提供。

<生活者からのコメント>

・全国チェーンのレストランに安定して卸せるほど収穫があって、生物が住みやすい環境作りにも貢献。私たち消費者も、びっくりドンキーでご飯を食べるとその取り組みに貢献できることが嬉しいです。（40代女性）
・北海道でしかも恵庭市は雪も多い上に凍るダブルの環境のもと、ふゆみずたんぼの実践に驚きました。しかも全食品を契約のアレフさんが社員や一般の方を交えての取り組みに、地域に根ざす会社の姿勢を感じとれます。（20代男性）

江崎次夫（愛媛大学農学部 客員教授）

「エチゼンクラゲ類を活用したクラゲチップを用いた緑化活動の推進」

日本近海で異常発生しているエチゼンクラゲやミズクラゲの持つ保水性と肥料分を利用し、土地に水分や養分を安定的に供給する研究を実施。これにより乾燥化、砂漠化した土地の緑化が可能となり、漁民の援助となる。

<生活者からのコメント>

・今回のプロジェクトの壮大さには驚かされました。緑地化計画や地球の環境保全に貢献するのはと大きく期待するところです。用途としては、海外活用も大切ですが、国内のとくに農業の発展のためにもっと活用できないものかと思えます。（40代女性）
・山から海までの流域生態の循環系の再生はあり得るのか期待をもって見守りたい。（50代女性）

乙女高原ファンクラブ

「乙女高原の自然を次の世代に！」

スキー場利用が2000年に終駑を迎え、草原の森林化が必至となっていた乙女高原の草刈りを継続し、生物多様性を保全。市・県と協働で、草刈りや、立ち入り制限を行い、植物群落を保護する遊歩道づくり等を実施している。

<生活者からのコメント>

・スキー場を草原として残す（再利用）ことで、草原らしい生物多様性を保とうとする活動に共感。注目したいのは「保全」「防護」「復元」といったいろんな手法で取り組みが行われていること、何でも人の手を入れるのではなく、自然の治癒力も生かすなど、適材適所できちんと考えられた取り組みが、いいところだと感じました。（30代男性）

一般社団法人 企業と生物多様性イニシアティブ

「企業グループによる、自社の事業における生物多様性への負荷低減と保全推進のための取組」

一般社団法人企業と生物多様性イニシアティブは、生物多様性に配慮した事業活動を行う先進的な企業の集まりです。企業による生物多様性の保全と持続可能な利用への貢献を進めることを目的に、5つのワーキンググループがそれぞれ月に一回は集まり、継続的に研究やツール開発を行い、活用しています。

<生活者からのコメント>

・企業が自ら保全へと積極的に動くのであれば、効率的だと思いますし、社会的にも説得力があり拡散しやすい。「推進ツール3点セット」が、大企業のように財力や人材に余力のない中小企業へも普及することを期待します。企業が取り組む為の取り組み、という視点に注目したいです。（40代女性）

特定非営利活動法人くすの木自然館

「重富海岸再生プロジェクト」

美しい海岸、豊かな干潟を取り戻すため、8年前から海岸のクリーンアップや干潟の調査を実施。その後、地元自治会、子どもたち、測量専門学校、市、漁協、鹿児島大学等が次々と活動に加わり、再生が進んでいる。

<生活者からのコメント>

・美しい海岸の再生に子どもたちも参加し、なぜ荒れてしまったのか原因を知ることになり、元の姿に戻すにはどうすればいいか考え活動していることに意義を感じます。子どもの頃から自然保護・再生の活動に参加することで、大人になった時に自然や生物多様性について真摯に考えてくれると期待します。地域住民、企業、大学、漁協など様々な分野の方が連携しての活動に、さらなる可能性を感じました。（40代女性）

倉本 宣（明治大学農学部 教授）

「多摩川における絶滅危惧植物カワラノギクの保全および復元活動」

激減している礫河原固有種のカワラノギクの基礎生態学的な研究、保全生態学的研究、復元生態学的研究の蓄積と成果に基づいて、保全および再生の市民活動を展開。市民、行政、研究者の協働で活動を行っている。

<生活者からのコメント>

・この活動を評価する理由は、市民・行政・研究者が繋がっている事です。小さな「現場」が見えづらい行政に、マクロを構成するミクロの世界ではこんな事が起こっているんだと、意識を押し上げるシステムが構築される二次的な効果が期待されます。（20代女性）

公益財団法人埼玉県生態系保護協会

「早稲田大学所沢校地 湿地再生10年プロジェクト」

大学当局とNPOの協議により、湿地の保全・再生とキャンパス建設の調和のため、様々な自然環境対策が取組まれてきた。10年にわたる取組の結果、生物多様性改善方策ができ、希少湿性動植物が次々と確認された。

<生活者からのコメント>

- ・広大な大学の敷地を使って、地域を巻き込んでこういう活動が全国展開されれば、自然界に関する意識が変わる拠点になるだろう。(50代女性)
- ・地域・行政・NPOなどが手をつないで生態系や環境に配慮したプロセスが進められるためのモデルケースになるのではと感じました。(40代女性)

自然史教育談話会

「トンボかヒトか」から「トンボもヒトも」へ

～官民学連携による絶滅危惧種ヒヌマイトトンボ保全の成功～

当会と三重県、環境コンサルタント会社が共同で行った生態調査結果をもとに、2003年、絶滅危惧Ⅰ類に指定されているヒヌマイトトンボの新しい生息地を創出。10年に渡るモニタリングと保全活動の結果、本種個体数の増加に成功した。

<生活者からのコメント>

- ・トンボは水辺の環境のバロメーターのような存在。このヒヌマイトトンボの成功例は、環境への地域住民の意識を変えることにも成功し、学校教育にも活かされており、他の地域での環境保全や生物多様性への活動に大いにヒントとなるでしょう。(40代男性)
- ・そのままにしておけば、浄化センターが建設され、絶滅危惧種のトンボも姿を消したのだと考えると、非常に有意義なものだと思います。(50代女性)

株式会社小学館集英社プロダクション

「みどりの遊び場 ～思いやりの心、命・もの・自然を大切に作る心を育む体験の場づくり～」(園庭ビオトープ整備とその活用)

「小学館アカデミー保育園」では、「あったかい心をもつ子どもに育てる」という理念のもと、保育園を建てる際に可能な限り「地域の自然や文化」を復活、保全させている。また、園内の生物多様性を高め、保育者の援助のもとで子どもと触れ合う機会を充実させている。

<生活者からのコメント>

- ・ビオトープは最初に環境を整えて、ある程度しっかり管理すれば、おのずとそこに小さな生態系が生まれ、生物多様性も豊富になってきます。この活動は子供の自然に対する感性を磨くのに大いに役立つと思うので国としても取り組んでほしいものです。(20代男性)

一般社団法人シンク・ジ・アース

「いきものがたり(書籍・映像作品)」による生物多様性普及啓発活動

書籍「いきものがたり」を2007年に発行、全国の小・中・高等学校など約45,000校へ寄贈。さらに、COP10の開催にあわせて映像「いきものがたり」を制作、公開。全国の教育の場で活用されている。

<生活者からのコメント>

- ・映像やプラネタリウムを利用して、小さな子供から年配者まで多くの方が興味を待ち、関わりやすい活動だと思います。まずは、たくさんの方の心に訴えかけ、心に響かせる事が大切だと思います。少しでも興味を持ってもらわないと何も始まらない・・・。その一歩として、非常に解りやすく素晴らしい活動だと思います。(40代女性)
- ・持続されること、一般への普及率は高いと思います。初めの第一歩として、できる限り大勢の人に見てもらいたい作品です。(60代女性)

森林塾青水

「流域コモンズによってよみがえる”さとのくらし”

～都市住民と農山村住民の交流によって維持・再生される草原の恵み～

地元住民と町役場と連携し、利根川上流における里山の自然の価値を現代的に見直し、その保全・再生と新たな利用管理の実現に取り組む。「里山の原風景」を回復させ、そこに生息する生きものの保全に繋げている。

<生活者からのコメント>

・課題は、著しく過疎化が進展する日本の農山村。人が暮らす里山をどのように実現するのかにあります。里山を再生するためには、暮らしを保証できるさまざまな条件整備が必要となります。「森林塾・育水」さんには、こうした課題について前向きに考える拠点になってもらいたいと期待しています。(60代男性)

株式会社TREE (Green TV Japan)

「生物多様性普及啓発のためのICTと映像教材を活用した次世代環境学習プログラム」

ICT(情報通信技術)と映像教材を活用し、対話型のワークショップ形式の授業を進める次世代環境教育プログラムを開発。国連生物多様性の10年 日本委員会の認定事業にも選定され、今後、全国での展開を予定。

<生活者からのコメント>

・グリーンTVの映像は、わかりやすく訴える力があります。次世代環境学習プログラムのカリキュラムを見ても、問題提起や理解促進の映像など、興味深い内容です。対話型のワークショップ形式で、児童自らが身近な問題として考える点が評価でき、今後の全国展開に期待したい。(60代女性)

特定非営利活動法人 どうぶつたちの病院 沖縄

「ヤンバルクイナをはじめとした野生動物の保護活動」

沖縄島北部(「やんばる」)地域のみにも生息し、同地域の生態系を象徴する希少な鳥類、ヤンバルクイナとその生息地の保全活動を10年以上に渡り実施。救護や飼育の他、さらに野生絶滅回避に向けた人工繁殖も実施。

<生活者からのコメント>

・豊かな森を保全するための計画的開発、自然と共生する先人の知恵、そして各自が問題意識をもつことが必要と感じます。(40代女性)
・駆除される他の動物も被害者であることも忘れてはいけない。保護活動を行う以外にもやんばるの自然を守っていくことも更に考えていく必要があると思いました。(20代男性)

長野県臼田高等学校農業クラブ・農林業研究班

「絶滅危惧種オオアカウキクサ農業利用地域プロジェクト」

9年前より県の絶命危惧種IB類に指定されているオオアカウキクサの農業利用に関する調査研究を地域連携で展開。中間山地域における休耕田管理や培養土への利用、堆肥化を目指し、継続研究や活動をしている。

<生活者からのコメント>

・地域に根差した高校の取り組みに好感が持て、アゾラという植物の色々な可能性もこの活動で知りました。まだ知られていない植物の効力が他にもあるでしょうし、その種が絶滅危惧種であれば保全と活用の融合が可能なことを発信できます。小学生とも交流があるのも素晴らしく、こうした人たちが横のつながりを作って地域の特色をいかした研究が広がるといいと思いました。(40代女性)

認定NPO法人 日本ハビタット協会 「復興の桑プロジェクト」

2012年5月より津波の被害を受けた農家と共同で、塩害を受けた畑に桑を植え、その葉を商品化するプロジェクトを開始。地域に存在する自然資源を最大限活用した新しい産業で、地域社会の再生につなげている。

<生活者からのコメント>

- ・桑について沢山の利用価値がある事を知り、大変興味深いプロジェクトだと思いました。塩害に役立つ事はそれだけで大変有益だと思いますし、蚕の蛹（さなぎ）をタンパク源として活用できることなども驚愕でした。（40代男性）
 - ・いい意味での人間のしたたかさ・強さを感じ、とても前向きな明るい活動。このようにひとつの素材の有効活用を考える形なら一般人も参加しやすく、応用展開が期待できる。（30代女性）
-

NPO法人 野生動物救護獣医師協会神奈川支部 「野生動物救護活動に関する支援事業」

野生動物救護活動の支援者（野生動物リハビリテーター）を養成、認定することにより救護体制の強化。また、認定された野生動物リハビリテーターが中心となり、普及啓発活動や、生息地保全再生への貢献に努めている。

<生活者からのコメント>

- ・リハビリテーターに一般市民が参加していることも素晴らしい。（50代女性）
 - ・市民ひとり一人が当事者という発想に共感を覚えました。（40代女性）
-